



OVERSEAS

Thailand —タイ—

海外事情【寄稿】



ドリアンを食べに行きませんか



藤波 督 FUJINAMI Tadasu
株式会社片平エンジニアリング
相談役

海外生活を楽しむ

「青年海外協力隊の60%は女性で、元気がある。それに比べ男はだらしく、中途帰国する者のほとんどが男である。コンビニが無いからと言って戻って来た者もいる」。居酒屋で久しぶりに会った友人と、海外を話題に盛り上がった。友人との会話が、いろいろなことを思い起こさせてくれた。

話は教育論にまで及び「海外に出ると、日本の良さが認識でき、ひとまわりもふたまわりも大きく成長する。帰国した彼らを学校の先生にして、新しい日本人づくりをしたらどうか」などと話す友人の、青

年海外協力隊の若者たちへの期待に、私は心より声援を送った。

また「アフリカの駐日大使を猪苗代に案内し、安積疎水と棚田のエコシステムを見せた。山の上に保水力のある緑があることの大事さを伝えた」という話に感動した。そして、日本におけるオランダ人技術者の銅像話から、台湾で灌漑事業を残した技術者八田與一を思い出した。

今の日本、過疎化や限界集落などに象徴されるように、都市と地方の格差が急速に広がっている。世界の半数の人たちが飢えで苦しんでいる時に、モンスーン

気候で太陽、気温、雨に恵まれた日本で、主食の米を生産制限するなどの政策は、世界への冒険ではないだろうか。国土政策や日本人の海外での役割を、何とかしなくてはならない。インフラに携わる私たちの役割は何か。

そのためには、グローバル社会に向けて、若い人たちに活躍してもらわねばならない。しかし国際化と叫びながら、総論は語れても個人としての具体的な話になかなか繋がらない。若い人たちの視野が海外に向き、少しでもカルチャーショックが和らぐ、そんなお役に立てばと筆を執った。



写真3 列車の旅は土地の生活が覗ける



写真4 椰子の木が点在する田園



写真5 バンコクのパゴダのある風景



写真6 肉屋さんでは肉片を指さして求める



写真7 果物の王様ドリアンの一生はこんな境遇から始まる

海外生活を楽しむには「郷に入れば郷に従え」と言う言葉の通り、どの程度異郷の地の風習に慣れることが出来るかで活躍の時と場が決まる。その対象には衣食住や言葉などいろいろあるが、南国タイの経験から、衣住は恰好さえつけなければ問題なかった。良きにつけ悪きにつけ、3度の“食”が大きな位置を占める。

食べ物の踏み絵

遡ること30数年、生後2ヶ月の子供と妻を日本に残し、タイのバンコクから南へ直線で600km、マレー半島東岸の中央部に位置するスラタニに赴任した。バンコクからは、一度ビルマ(現在のミャンマー)の国境に出て半島を横断し、ようやく辿り着く。その距離約1,000km。ここは雨季になると陸の孤島となる。

赴任当初は下痢に悩まされていた。スラタニは北緯9度の熱帯の地。まだ冷凍技術は勿論、冷蔵技術も普及していなかった。腐敗しやすい肉類は焼くか油で炒めるしかない。外食に頼る毎日の食事は、お皿の下にマッチ箱を置いて傾け、油を片側に寄せながら料理を口に運んだ。下痢を繰り返しながら、それでも食べ物を入れて40℃近い炎天下の現場に向った。体には水をかけ、胃には辛い唐辛子で刺激を与えて暑さに対抗する。そうしないと体力が持たない。半月位経ってやっと下痢は止まった。旅行者から住人になったと思った。

そうなる、食事はカレーをはじめ麺類など美味しいものばかりになる。カレーはタイの家庭料理であり、見た目も味も多様で、いろいろと楽しませてくれた。基

本はインディカ米のご飯に、炒めたり煮たりした食材をかけて食べるのだ。麺は小麦粉を使ったミーと、米粉を使ったクワイティオウの2種類。汁物や炒め物にと多くのメニューが用意されていた。流行のタイ宮廷料理から現地の家庭料理まで、スパイスの効いたこの土地ならではの料理を楽しませてくれた。

また、南国の果物は格別である。朝食には、マナオ(レモンみたいな柑橘)をたっぷりかけたパイヤは欠かせない。果物の王様ドリアン、女王マンゴスチン、食べ出したら止まらないランプータンやランサク、仏教国タイの仏像の頭を思わせるノイナーなど、取りあげると限がないくらい多種多様に楽しませてくれた。

ともあれ、現地の食事が口に入らないとだんだん体力が衰え、仕



写真1 朝食は鶏肉のかけご飯や麺を楽しんだ



写真2 飲んだ後のクワイティオウの味は忘れられない



写真8 椰子の影が写る水辺の景色を堪能



写真9 葉陰に沈む夕日に一日の終りを感謝



写真10 川沿いの水上家屋。ボートが足となる



写真11 川沿いの船着場には焼鳥の屋台などが並ぶ

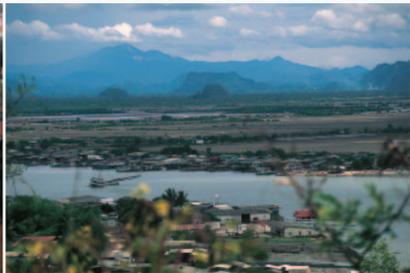


写真12 マングロープの林はあっという間に海老の養殖場へ変わった



写真13 サイドロー方式で土を盛りあげて造った道。乾季には干あがり水牛の遊び場となる

事に対する意欲やモチベーションが下がって行く。現地の人たちも、私たちが順応しているか、リトマス試験紙ならぬ食べ物踏み絵を用意して、その度合いを確認する。現地の食べ物に挑戦する私たちの姿に、現地の人たちも安心したのである。

果物の王様ドリアンとの出会い

赴任当初、バンコク空港では今と違ってタラップを降り、南国の強烈な太陽が照りつけるコンクリート舗装のエプロンを歩いてターミナルビルに入った。クーラーなんて無い。その時、蒸せるような異様な臭いに驚いた。その臭いの一つにドリアンが含まれていたと思われる。これがドリアンとの初めての出会いである。

赴任1年目は、最初に食したドリアンが良質でなかったのか、あるいはその臭いに負けてか、好んでドリアンを食べることなく過ぎた。2年目は「こんな美味しいものをなぜ去年は食べなかったの

だろう」と悔やんだ。ファーストインプレッションがいかに大切かを思い知らされた。と言うよりも、それらの臭いに適応したということかもしれない。

以来、帰国しても、東京でタイフェスティバルがあると聞いては出かけ、最近では果物屋さんのお店先にも並び手に入りやすくなったドリアンは、時折、その味を楽しませてもらっている。

日本では経験できない生活

赴任から3ヶ月後、妻が生後5ヶ月の息子を抱いてタイに来た。その日の夕食、今や世界3大スープと持て囃されて、辛くてパクチの入ったトムヤムクンを、妻が「美味しい」といって食べた。これなら適応してくれそうだと安心した。

数日後、ゆっくり走る“特急列車”でマレー半島を南下した。列車は15時頃にバンコクを出発し、翌朝の4時頃にスラタニに到着する。夕暮れの車窓からは、大きな太陽が椰子の木が点在する田

圃を赤く染め、ビルマ国境の山々の上を、出たり入ったりしながら沈んでゆく光景が眺められた。すばらしい歓迎であった。

この特急列車には個室があり、食事も運んでくれる。ジーゼル機関車で牽引された列車が駅に着くたびに、女性や子どもが、いろいろな食べ物やお土産を頭の上の竹籠に載せて売りにくる。プラットホームが無いので、窓と竹籠の高さが丁度同じになる。今でも、翼を広げた鳥のような赤い大きな焼き鳥を思い出す。

その後も何度か、シンガポールまで行くこの国際列車を利用した。私はこの列車の旅が大変気に入った。道路の旅では、家々の玄関や窓などの表しか見えない。列車の旅では、裏からタイの人たちの生活を覗くことができる。台所仕事の様子、水を蓄えている甕の数、あるいは水浴びをしている女性の姿まで。そして集落ごとに、空に向かって濃い黄金色の屋根の先を競り上げたお寺がシンボ

ルとして存在感を示す。時には黄金に輝くパコダ(仏塔)を拝むことが出来る。豊饒な大地の緑も、バンコク周辺の野菜畑から果樹園に変わり、広々とした田圃へと景色がのんびりと移る。それを見ていると飽きることがなかった。

妻が到着すると食生活は一変した。市場には南国の多様な食材が溢れている。朝6時に出向き、真二つに斬られ吊り下げられた豚の部位を指差して買い求めるのである。日本ではキャーと叫び、目を覆うところであろう。日本食とタイ料理が混在しながら、だんだんタイ料理主体に変化していった。

水は食事から水浴まで、屋根に降る雨水を樋で導き、甕に溜めて使う。雨季や中間期はともかく、乾季になると貴重な雨を大事に集めなければならない。降り始めから甕に入れると鳥の糞や羽毛が入る。タイミングを見計らって樋を操るのだ。飲み水を第一に考える妻は、雨に洗い流された後の綺麗な水を導きたい。女中さんは暑い乾季には、少しでも多くの水を溜め、水浴をしたいのである。トラブルの一つであった。

水が無い時は、川まで車のトランクにたくさんのバケツを積んで水汲みに行った。それを煮沸し、冷まして上澄みを飲料水にするのである。衛生観念の違いを克服するのに、そんなに時間はかからなかった。ここでの生活はまさに日本では経験できないものであった。

住まいは水上家屋

住まいは、湿地の中に数本の柱で支えられた水上家屋であった。食後の残飯などは「自然に帰れ」と窓から放り投げれば、鳥や小動物や魚や虫たちにあっという

間に消化してもらえた。

ガラスの入っていない観音開きの板製の窓は、いつも「今日の夕焼けは?」と期待させ、南十字星を地平線の彼方に捜すロケーションは、写真好きの私には嬉しいものであった。美しい夕焼けになりそうだと判断すると、すべてを放り出し、近くのタピー川の岸辺に車で向かう。広い川幅をいっばいに染めて、オレンジ色の太陽が、椰子の木と水上家屋の家々の上に沈んでゆく。色を落としてゆく川面には、細長いボートが人々と荷物のシルエットを映しながら縦横無尽に走る。この時点になるともう写真は撮れず、記憶の中に焼き付けるだけである。

夜の岸辺は、周辺の島々への船着場となっており、そこでは裸電球の明かりの下、多くの屋台が軒を連ねている。行き交う人たちの前に、ビニール袋に入った“かち割り”ジュースや果物、お菓子などが並んでいる。機械で製造されるパン類は高価だが、いろいろや博多の鶏卵素麺みたいな和菓子に近い手作りのお菓子が安くて旨い。

明るいうちはシャッターを押すのに忙しく、日が暮れてからはのんびりと南国の夜の時間とそれらの味を楽しませてもらった。

若い皆さん、出番ですよ!

この地は海産物が豊かであった。今は日本向けに海老の養殖が盛んである。日本では生食が好まれるが、タイの人たちは当時、生では食べなかった。川の水が混ざり、風土病が怖いという。日本人の仲間と「この海老を生で食べて風土病に罹る確率と、交通事故にあう確率と、どちらが高いだろう」などと言っては、味を楽し

んだ。幸いその後何事も無かったことは言うまでもない。

山に入って調査していた時、澄んできれいな水溜りがあったので飲もうとすると、「だめだ! この水は死んでいる」と言われた。一方、山の法面から白濁した水が出ているのを指し、「これは飲んで良い。これは生きている水だ」と言うのだ。白濁した水を飲んでから、ポケットから正露丸を取り出し口に入れた。熱帯雨林の高温多湿の中では、時間の経過というものは重大なのだ。自然の中で生きるには、感覚や勘が頼りなのだ。それにしてもその違いに驚いた。以来、山に入る時は重い椰子の実をぶら提げて行った。

とはいえ、仕事は「郷に入れば郷に従え」ばかりだと私たちが存在する意味がない。日本の技術を伝え紹介しなければならない。働かざるもの食うべからずの文化と、自然気候が穏やかで働かなくても食える文化、食わなきゃ働かない文化、との差を思い「正常の範囲は広い」と感じながら2年2ヶ月に及ぶ生活は、あっという間に過ぎた。

またオリエンという名のアイスコーヒーの味を楽しんだ。たくさん買って帰国したが、なぜか日本では美味しくなかった。その土地の気温や湿度などの幾多の条件に合っこの味なのだろう。日本には情報が溢れ、サービス業が発達し、据え膳状態で美味しいものを手に入れることが出来る。しかしその地でないと味わえないものがある。

「私たちは文明のおかげで楽を得て、楽しみを失った」という言葉を思い出した。「若い皆さん、出番ですよ!」